

「ひかり」号で東京記者「五年間の苦闘、三千八百両の巨額を投じた国鉄自慢の夢の超特急、東海道新幹線が一日から営業を開始した。如女列車、ひかり一、二」と

新幹線初乗り

「ひかり」号は東京、新大塚駅をスタート、豊橋付近で止らなうこの朝の東京駅十九番線ホームは、そのままたま、四時の新幹線を西側で走り、明後、大正、昭和九三年の日本の鉄道史に新しい時代の到来を告げた。



一、二等車ほぼ八割

鉄道マニアも「感無量」

止潮れ、石田國鉄総裁がひかり一、二の先頭に導かれた紅白のテープに金のハサミを入れて、無事新幹線も終わり、準備はすべてOK。ホームには送迎の人や乗車の一瞬を見ようと、カメラを手にした者たちがあふれた。

午前六時、発車のベルが轟然と鳴る。新幹線一帯の乗客を乗せて、ひかり一、二はひびくり止ホムを離れた。一等車はほぼ八割、二等車は五割の乗客。若者の元気な姿が目立った。

①つめかけたお客さんで満員の「ひかり」号のビュッフェ。②一等車Aの乗客、増井昭さん。③因鉄の白機はスピードもさること



肥前府と新幹線建設の歴史や沿線の名所を解説したばかりのカタログが配られる。品川を過ぎた所で車体を心から右へかきつけた。スピードを上げていった新幹線もアツという間に通過。速達計の針は最高速度の二百十に達した。車窓の風景は美しい。入る者、めい想する者、思い思いのポーズで世界のスピード感を味わおうとする。しかし五百のロングレールと筋首、防熱の二重ガラスのせいか、列車特有のカタコト音もなく、スピード感はまだ感じられない。ただ時おり車体が左右に揺れる。

なから、サービス係に「つれづれ車内の設備はどう。さきまアビュッフェへ。右側の車窓は一列に座席が設けられ、ゆくりおわってスピードを落とさず、おろよろと進んで、あいつはビュッフェは初乗りの快味をビールを飲みながら味わおうとする乗客を眺め、メニエをみる。ヒール百六十、カレー百五十、肉料理、生野菜の百四十の定食まであって、費用が、試食した乗客の結論は「まあまあ」ということ。トイレも従来の物をそのままに

毎日新聞(夕刊)
昭和39年(1964年)10月1日